

音楽とアートの祭典「鉄工島フェス」 ——職住分離の人工島・京浜島が創造島へ

東京都による職住分離の政策から生まれた京浜島

東京都大田区の臨海部に、羽田空港北西の東京湾上に位置する人工島がある。それが京浜島である。敷地総面積は 103.3 ヘクタールであり、埋立地名は京浜六区という。

大田区臨海部では、1967 年に人工島の平和島、昭和島の竣工を皮切りに、1974 年に京浜島、その後、城南島、羽田空港沖合展開事業が竣工・形成され、地域一帯で基盤技術の産業を中心としたものづくりの集積拠点、羽田空港や東京港との近接性を生かした流通業務拠点としての機能を担っている。



写真中央部分が京浜島 出所：東京都京浜島工業団地協同連合組合

島内全域が工業専用地域の指定で、一丁目から三丁目まで存在する。東京湾岸道路沿いの一丁目には倉庫や物流関連施設があり、二丁目には機械金属加工等の中小工場が 185 社、15 の協同組合ごとに集積しており、京浜島工業団地を構成している。製品の設計や最終製品の製造を行っているところは少なく、基盤技術を生かし、大手メーカーの部品加工業務を

担っているところがほとんどである。三丁目にはコンテナバースや倉庫、大田清掃工場等が立地している。

1965年～1974年頃、大田区の工業は中小・零細工場によって構成され、主に大企業の下請けとして職住が一体化し、「朝起きてから夜寝るまで」製造に携わることで、納品までのスピードと精度を担保する強みを活かしてきた。

しかし、一方で騒音、振動などの公害問題が顕在化することにもつながった。そこで東京都は1964年に工場を埋立地に移転する方針を立てた。

1971年には「都民を公害から防衛する計画」を策定し、住工混在地域に立地する工場のうち、騒音・振動型の工場を「京浜六区公害工場移転集団化事業」として京浜島へ集団移転させた。そのためこの地域に居住する人はひとりしかいない。工場を操業する目的だけで成り立っているからである。

その京浜島で2017年から行われている「鉄工島フェス」という音楽とアートの祭典がある。2019年11月3日に第3回のイベントが開催された。今回はその模様をレポートし、工場集積の人工島から生まれる創造性について考えてみたい。

アートファクトリー「BUCKLE KÔBÔ」誕生から鉄工島フェス開催へ

設立背景からもわかるように、京浜島にはかつて中小製造業の工場が集積していた。しかし、時代の変遷に伴って廃業が相次ぎ、跡地には廃棄物処理場やリサイクルセンターが集積した。そんな中、須田鉄工所から工場の一角を借り、寺田倉庫（東京都品川区 代表取締役 寺田 航平氏）による「BUCKLE KÔBÔ」が2016年に設立された。

工場集積地であるがために、騒音や火を出すことへの規制が低いため、アーティストの創作の場として注目したのである。オープンアクセス型アートファクトリーとして、2階建の工場の1階には様々な加工作業ができるオープンなアートファクトリー、2階にはオフィスとアーティストの制作・滞在スペースを展開。また、世界各国の集合クリエイティブスペースと連携し、東京のクリエイティブのハブにしていくことを目的としている。

この BUCKLE KÔBÔ 誕生が契機となり鉄工島フェス開催につながった。第1回は、2017年9月30日・10月1日に開催され、須田鉄工所と BUCKLE KÔBÔ が中心となり、約2000人が来場した。

画材アドバイザーとしては現代美術のアーティストとして有名な会田誠が参加し、ミュージシャンの石野卓球（電気グルーヴ）、七尾旅人、TRI4THなどが出演した。また、漫画家の根本敬は『新ゲルニカ』（パブロ・ピカソの『ゲルニカ』と同サイズ）の大作を出品した（展示は10月1日のみ）。映画作品としては塚本晋也監督の『鉄男』など、「鉄」「島」「働」をテーマにした作品3本が上映され、来場者の注目を集めた。



根本敬の『新ゲルニカ』 出所：根本敬ゲルニカ計画 Twitter

続く第2回は、2018年11月4日に4会場（須田鉄工所 / 酒井ステンレス第二工場 / 北嶋絞製作所 / BUCKLE KÔBÔ）にて開催された。

コンセプトビジュアルはデザイナーの中里周子が主宰する NEWPARADISE が制作を担当し、「宇宙人同士のコミュニケーション」という形で多様な人々との交流を表現した。



鉄工島フェス 2018 コンセプトビジュアル 出所：NEWPARADISE

第3回は京浜島10会場で開催

第3回は、2019年11月3日に10会場（畠山鐵工所、光機械製作所、BUCKLE KÔBÔ、清新工業所、須田鐵工所、ムソー工業第一工場、西商店、ゑびす興運、北島紋製作所、池田印刷）で開催された。

コンセプトビジュアルとしては戸田悠理が、CG/EDITは平田尚也が手がけた。アート企画としては、BUCKLE KÔBÔを拠点に活動するSIDE COREによる「LEGAL SHUTTER TOKYO」、公共空間を中心に大型プロジェクトを行うことで国際的に知られる西野達による野外展示、集団制作のスタイルで作品を発表し続ける快快によるパフォーマンス、第56回ヴェネチア・ビエンナーレ 国際美術展日本館キュレーターを務めた中野仁詞キュレーションによる映像インスタレーション等が行われた。



鉄工島フェス 2019 コンセプトビジュアル 出所：戸田悠理 Twitter

ミュージシャンは、第1回からの連続出演となる石野卓球に加え、鉄工島フェス初登場の mouse on the keys、FNCY、chelmico、横田信一郎など多彩な顔ぶれだった。

筆者も1日かけて鉄工島フェスを周遊してみた。普段、工場として操業している集積地に、お目あてのミュージシャンやアーティストを探して、たくさんの若者たちが集う。京浜島は何度となく工場の取材で訪れていたが、そんな光景を見たのは初めてだった。



多くの若者が京浜島の工場に集う 出所：筆者撮影

受付を済ませ、初めに須田鉄工所へ入った。すると工場の片隅に猫を撫でながらスタッフジャンパーを着て座っていた男性がいた。それが須田鉄工所（冷暖房設備工事、冷凍冷蔵設備工事、空調設備工事）代表取締役の須田真輝さんだった。

第1回から実行委員長を務めている鉄工島フェス運営の中心人物のひとりである。京浜島の工場とアーティストたちの懸け橋の役割を担ってきた。しかし気負いはなく飄々とした雰囲気的人物だった。

筆者は「こんなにたくさん若者たちが京浜島にいるのを初めてみました。すごいですね！」と声掛けすると、「毎年規模は大きくなってね。それを『次にどう生かしますか？』と聞かれることが多いんだけど、次のことを考えるよりもまずは今ここで、京浜島を知ってもらうことが一番。」と答えてくれた須田社長。

そしてこう続ける。「いずれは若者だけではなく、年配者も楽しめるものがあったらいいよね。例えばカントリー（のライブ）とかね」と猫を撫でながら答える。

須田鉄工所は、須田社長の父が京浜島に最初に入り工場を作った入居第1号の企業だ。

それ以前は蒲田で操業していたという。京浜島 45 年の歴史を見続けた目には、京浜島の
今と未来が見えているのかもしれない。



須田鉄工所 代表取締役 須田真輝さん 出所：筆者撮影



須田鉄工所で開催された FNCY のライブ 出所：柏良光（カシワミルポーラ）撮影

各所を回遊すると様々なパフォーマンスや作品に出会う。個性的で多種多様なものばかりだ。日本で1980年代に大流行した「竹の子族」という現象があった。原宿に若者が集い、独特のパフォーマンスをしていた。それを現代風にアレンジして、奇抜なファッションで闊歩する「ケケノコ族」にも出会った。



ケケノコ族のパフォーマンス 出所：筆者撮影

新たな翼に平和と未来への飛翔の祈りを捧げる

その中でも、筆者の興味を惹いた展示があったので紹介したい。「零戦風機～翼プロジェクト」というものである。京浜島は羽田空港至近という場所柄、飛行機が頭上を何度も横切る。その音さえも鉄工島フェスの効果音として溶け込んでいるかのようだ。そこで見つけた翼プロジェクトというネーミングに心惹かれた。

この作品は、鈴木椋大さん・鈴木智子さんによる親子ユニット「Reel-to-Reel/りーるとりーる」によって考え出されたものである。

1950年代初期に作られた三菱製の扇風機を「譲ります」と画像入りで紹介されていたtwitterを見た鈴木椋大さん。三菱製の扇風機は日本が第二次世界大戦（1939～1945年）後、たくさん作られたものだった。それは日本が敗戦後、零戦を作っていた職人たちが復興を願って作られたものだと感じ、すぐに「欲しい」と連絡を取り入手したという。

展示ではその古い扇風機に当時の技術力の要のひとつ、零戦のプロペラ羽のプロトタイプを現代の大田区の職人に作ってもらい、扇風機に付け替えた。それは、「可変ピッチ・プロペラの三枚羽」だった。そして鑑賞者は思い思いの願いをこめて、その扇風機の周りに紙飛行機を折って並べていく。

今後は、超ジュラルミンの可変ピッチ・プロペラを扇風機と合体させるために大田区を中心とした職人達と製作を詰め、費用捻出を図るべくクラウドファンディングを2019年12月に立ちあげる予定だという。

筆者はその扇風機の前で平和と未来への飛翔の祈りを捧げて、展示会場を後にした。



親子ユニット「Reel-to-Reel/リールとゥリール」 出所：EGACOH LLC 撮影



「零戦風機～翼プロジェクト」の展示 出所：EGACOH LLC 撮影

その後、ムソー工業（試験片加工、試験治具・実験装置の設計製作）第一工場へ向かった。工場の受付付近には、代表取締役の尾針徹治さんがいた。「京浜島がアートと音楽によって新しい化学反応を起こすように」という思いで、今回の鉄工島フェスの副実行委員長を務めたという。30代の若き2代目経営者である。

同工場では、横田信一郎さんのライブを鑑賞した。横田さんはナイトペイジャー（自動車のカスタマイズパーツやレース部品製作）の代表取締役である。現役の町工場の社長でありながら、並行してミュージシャンとしての活動を続けてきたパラレルキャリアの持ち主だ。2019年6月にはアルバム「I know you like it」を、10月には2枚組アナログ盤「Ultimate Yokota」をリリースした。

横田さんのライブはハウスミュージックの軽快なリズムにステップを踏む人たちが溢れ、熱気に包まれた。



ムソー工業第一工場のライブ会場 ライブ終了後の横田信一郎さん
(いずれも筆者撮影)

ライブ終了後、横田さんは「30年前に作った作品を25曲くらい詰め込みました。地元大田区のイベントで出来て本当に良かった。」と語った。

鉄工島フェスの会場にいて、音と光と色彩のシャワーを浴びて過ごした1日だった。これらは工場の外観、匂いや製造物等との親和性が高く、また現実と非現実との境界がなくなるような不思議な感覚に包まれる。このフェスを続けていくことで、工場集積地が音楽とアートの触媒となって、新しい「もの」を生み出していく日も近いかもしれない。京浜島が創造島として存在感を持つ未来に期待したい。

文 奥山 睦 (Mutsumi Okuyama)

编辑修改 JST 客观日本编辑部

<参考資料>

京浜島工業団地

<http://www.keihinjima.or.jp/>

東京都京浜島工業団地協同連合組合 facebook ページ

<https://www.facebook.com/keihinjima>

BUCKLE KÔBÔ

<https://buckle-kobo.tokyo/ja/>

根本敬ゲルニカ計画 Twitter

<https://twitter.com/ntguernica/status/915149344671653888?lang=el>

寺田倉庫

<https://www.terrada.co.jp/ja/>

鉄工島フェス 2019

<https://tekkojima.com/>

鉄工島フェス 2018

<https://iif2018.tekkojima.com/>

戸田悠理 Twitter

https://twitter.com/yusuketoda_1/status/1156808298890313728/photo/1

零戦風機～翼プロジェクト

<https://awrd.com/creatives/detail/5183161>

ムソー工業株式会社

<http://musokogyo.co.jp/>

ナイトペイジャー

<http://www.night-pager.net/>